優秀賞

# 茶道の美しさ

千葉大学三年（千葉県）
野口　明日美

黒樂茶碗に、濃緑の濃茶。重みと存在感があり、落ち着きを感じる。素敵な色合いである。季節に合ったお道具やお菓子は、それにしようと選んだ人がいるから、お客様は楽しむことができる。過去の掛け軸と、現在を生きる花。「静」かな空間に「動」きがある。色合い、対比、心遣い。絶妙なバランスがとれているから、心の奥に響くものがある。思わずため息をついてしまうような、そんな茶道が私は好きである。

茶道に出会ったのは、高校一年生のときだった。「『道』がつくものを学生時代に経験しておくといいんじゃない？きっと役に立つよ」そう母に勧められ、高校の茶道部に入部した。大人になっても続けられそうで、しかも落ち着いた素敵な人間になれそう。はじめはそのような理由だった。茶道は奥が深い。もっと知りたい。そう思うようになったのは高校時代のお稽古中である。茶道はひとつひとつ手順が決まっている。始めたばかりのころは、茶道とはお茶を点てて飲むだけだと思っていたので、なんて複雑で覚えることが多いのだろうとばかり思っていた。しかし、お稽古で茶筅通しにさしかかったとき、「お茶碗にお湯を入れているのは、お茶碗を温めておくため」「お茶に茶筅の先のカケラが入らないように、折れかけのところがないか確認している」と教えていただき、一見複雑に見える動きだが、お客様のことを思ってお点前をしているのだということをはじめて知った。この時の感動は今でも覚えている。それ以来、「ただ見る」「ただ上げる」「ただ運ぶ」、そういうひとつひとつ区切られた機械的な作業ではなく、全体として一つの流れのあるお点前を意識できるようになった。ひとつも無駄がなく、相手のことを常に思ったお点前の動きの美しさにすっかり魅了されてしまい、その美しさを、自分がお点前をするときにも大切にしたいと思った。姿勢、足の運び、指先まで美しいお点前を目指したい。それには先生にご指導いただきながら、お稽古するしかないと思う。

大学に入学後も迷わず茶道部に入部した。これからの大学生活でも茶道ができるのだという喜びと、上達したいという気持ちを抱いていた。しかし、ここで一つの問題が起きる。それが新型コロナウイルスの流行である。茶道部も、約一年間活動することができなかった。その最中で考えたことがある。授業も部活も同時双方向のオンライン方式に

切り替わり、パソコンで自分を映して、画面の中の相手とコミュニケーションを図ることが増えた。しかし、そのような方式と茶道はなんと相性が悪いのだろう。茶道というのは、お茶を点てる人と、それを飲んでくれる人がいなければ成り立たない。たとえ、画面の向こう側で、お茶を点ててくれたとしても、こちらの画面からそれが出てくるわけではないのである。これでは、お茶を点ててくれた人の気持ちを直接受け取ることはできない。千 玄室大宗匠著『茶の楽しみ』のなかで、「ただあなたのためにと一生懸命に点てる一服」には、その気持ちが相手にも伝わり、「『本当にありがとうございます』と心からの感謝の気持ちになる」「お互いに気持ちがなじむ」ことが「一期一会」だと述べられている。よく画面越しのやりとりでは、本当の気持ちが伝わりにくいというが、画面を介すという不連続な面があることで、本当の意味での心を通わすことはできていないのではないかと考えた。活動を再開したい、できれば毎年行っていたお茶会もやりたい。そのような思いは心の中にあった。だからこそ、制限付きではあったが活動が再開できることになったときは嬉しかった。感染対策として自服としたが、忙しい大学生活のなかでほっと一息つける時間、先生にお稽古していただく、部員と茶道を通して同じ時間を過ごす、私にとってはかけがえのない連続した時間だった。

コロナ禍をはじめ、現在は非常に不確かな情況である。しかし、ひとつだけ確かなことは、私は茶道をこれからも続けたいということである。茶道の知識を増やして、茶道そのものをもっと楽しみたい。もっと茶道の奥深さ・美しさに触れてみたい。そのために、先生にご指導いただきながら、お稽古を通して体得していきたいと思う。